

- 第一 自然故郷に固着すること即ち先入主となるの理に基くものなり
- 第二 父母親族朋友に固着すること
- 第三 故郷の山川風月殊に慕はしきこと
- 第四 言語の同一なることは人を結合せしむる大要素なること
- 第五 風俗習慣の同一なるが爲大に同情の發動を助くること
- 第六 同人種なること
- 第七 爵位、財産、名譽、及び國民より其人に對する信用等は愛國の情を強からしむること

### 第十六章 注意

注意

本章に於ては觀念が腦中に入り動神經の中央を刺激して神經及び筋肉を活動せしむる性質を論せんとす

觀念は物質の如く形體を有せず隨て又五官に觸るゝものに非るなり其れ斯の如し而して其神經を刺激すとは果して何の謂か斯の如きは固より假

三

三

觀念の意  
味  
注意  
力

りに解釋をなすに止るのみ  
觀念の存するや必ず之と相伴隨する腦髓の活動あり故に觀念が神經を刺  
激すとは即ち其觀念に伴隨する腦髓活動の刺激を言ふなり而して觀念及  
び其觀念に伴ふ腦髓の活動は恰も物の表裏線の如く兩者相離るべ  
からざる關係を有す故に本章の所謂觀念の意味はたゞ主觀的觀念に限ら  
ず腦髓の活動をも含有することを記憶すべし  
觀念の腦中に活動するや或は現はれ或は消へ意識中は恰も演劇の舞臺と  
略ぼ同一の趣をなす其觀念の現出するや同伴の法則により決して偶然に  
出るものにわらず而して同伴法以外又其活動を定むる力あり意識の結合  
的性質即ち是なり此作用により既に同伴法によりて意識中に現はれたる  
觀念中或るものを意識中に留め他のものを意識中より拒絶す之を國家に  
譬ふ國家は一個人の集合より成立し政府ありて其人民を支配するものな  
り之と同しく意識中には幾多の觀念あり其觀念を支配するものは實に意  
識の結合的性質なりとす而して或一箇人が政府を代表して人民を支配す



注意力の活動

るが如く意識の結合的性質に於ては或一箇の觀念其代表者となりて他の觀念を支配するものなり此支配力を稱して精神の注意力といふ今注意力の精神中にありて活動する方法を述べん吾人若し注意せざるときは始め種々の觀念意識中に現出すと雖も霎時にして消滅す然るに吾人注意を以て思考するときはその思考せんとする觀念精神中に活動し其一部分は意識の中心にありて他の觀念を支配する力となり其作用によりて今思考せんとするに必要なる他の觀念を蒐集し又他の一部分は動神經の中央に刺激を與へて筋肉の収縮を惹き起すものなり顔面の筋肉手足の筋肉若くは眼の筋肉の収縮するが如き皆此作用による是を以て腦髓の活動は筋肉の収縮と常に相離るべからざるを知るべきなり蓋し精神活動の爲めに動神經刺激せられて筋肉の収縮を惹き起し又反射して一種の筋肉収縮の感覺を精神中に生ず之に依りて以て腦を攪き起し今思考せんとするにと關係する材料を探して意識の中心に集むるものなり斯くして集めたる材料の補助により既に意識の中心にある觀念の活動をして更に活潑な

三四

注意と吸収

らしめ精神の力を此一點に聚注し以て其目的を達するを得るものなり腦中には吸収力なるものあり精神中一部の活動をして活潑ならしめん爲めに悉く他の觀念を吸収し精神をして靜穩ならしむ故に注意力の働は一方に於て材料を意識の中心に蒐集するにありと雖も他の一方にありては不要の觀念を吸収し以て腦中をして靜穩ならしむるにあり是れ注意力の一要素たり

三五

注意の主觀的及客觀的

斯く注意力は精神中にありて活動すと雖も注意なる語はたゞ精神中の働きのみに關するにあらず又客觀的事物に注意する意味として使用することあり然れども其要素に至りては精神中の注意と同じく一の觀念内に備はりて其材料たる事實を集むるものなり只其差は材料を得るの方法にあるのみ即ち主觀的注意は其材料を觀念中に求むと雖も客觀的注意は之を客觀的事物に求むるなり

注意の他働的及自動的

注意の働きに二種あり他働的及び自動的是なり他働的注意とは外物の刺激により若くは偶然意識中に現出したる觀念の爲めに制せられて精神活



動の方向之に従ふものなり幼時に於ては精神の活動主として他働的注意によりて制せらるゝが故に幼兒の考ふことは重もに外物の刺激によるものなり而して他働的注意を變じて自働的注意たらしむるは實に教育者の責任なり

自働的注意漸く發達するときには精神の活動は外物の爲めに左右せらるゝことなく意志自由之を支配するを得るに至る是れ普通教育の最も大切な要素なり

他働的注意は素より他働なるが故に嚴格の意味に於ては之を注意と名くる能はず然れども一の觀念が一點に精神の活動を集むるが故に假りに之を稱して注意と言ふ他働的注意に二種あり

第一 外物の刺激によりて精神の活動を一點に集めしむるもの是なり目に美麗の色を見耳に啾啾の音を聞くが如きは他事を忘れて精神の活動を其一點に集めしむること屢なり

第二 精神に現はるゝ觀念が刺激力となりて精神の活動を一點に集むる

心期

ことある是なり哲學者若くは數學者が事物の理を考ふるは多くは自働的注意によるものなり然れども又往々或觀念が遽然精神中に現はれて全く精神の活動を奪ふことあり斯の如き場合に於ては精神の活動は意志の支配中に在らず又外物の爲めに心を奪はるゝにもあらず精神中なる一の觀念の爲めに精神の全局悉く支配せらるゝが故に他より之を見るときは其人の舉動實に奇異なるものあり之を稱して昏迷といふ

心期とは未だ起らざる現象の必ず起り來らんことを心に期するの謂なり是れ亦注意の一種なりとす斯の場合に於ては感覺を受くる前先づ精神中に於て其用意をなすを得例へば今鐘聲の起らんとするを期するときには曾て經驗したる鐘聲の心像記憶となりて現出し意識の中心にありて今來らんとする感覺の爲めに用意をなすものなり然るに若し極めて微細なる聲音耳に達するときには精神中多少の混亂を生じ隨て不快の感を覺ゆるものなり之に反し心に期したる感覺と實際の感覺符合するときには大に愉快を感ず例へば吾人音樂を聴くとき毫も其調子を知らざるときは快樂甚だ少



しと雖も若し其調子を熟知するときは愉快甚だ大なるが如き以て知るべきなり蓋しこは音樂の調音を聴く毎に其續て來らんとする調音を前知するを以て豫め精神中に其調音を受くべき用意をなし得るによる即ち心期と實際と相符合するによるものなり

心期の爲めに一の奇異なる現象を生ずることあり例へば歐米に於て行はるゝ一の迷信即ち四人のものが机の周圍に坐し手を其上に置くときは其机は終に自働的の運動をなすといふが如き是なり元來神經は甚だ疲勞し易き性質を有するが故に机上の手は暫時にして疲れ殆んど感覺を失ふと同時に心期(机が自働的に動くといふ)は精神に其觀念を起し觀念漸く明了となりて終に動神經に刺激を與へ自ら机を動かすに至る然るに其人の感神經は既に大に疲勞し且注意は其一點に集るが故に何の感覺をも識別する能はず唯机の動くべしと云ふ觀念のみ活潑に活動し動神經を通じて机を動かさしむ而して其手の動くは机の動くが故に然るなりと自ら欺き且驚くなりアラデーは器械を以て明了に其机の自動するにあらざるを示

したり

本能及び習慣

第十七章 本能及び習慣

本能と習慣は本と同一の性質を有す只一は遺傳によりて之を受け他の一は經驗によりて得たるの差異あるのみ此二者通有の性質は精神の刺激的性質を有し直接に動神經に關係して身體の運動を惹き起すにあり故に予は此二者一般の性質を論ずるに先ち感神經と動神經の關係を説明せんとす

感神經と動神經の關係は未だ少しく明了を缺く所なきにわらず唯予は其既に明了のものに就て説述せん抑外物の刺激感神經を通じて腦中に入るや直に動神經を刺激せず終に散亂して滅亡の狀をなすことあり又其刺激腦中に達するや直に動神經を刺激して運動を現はすことなきにわらず元來神經の組織は固定するにあらず故に時々變更することあり外物の刺激偶々動神經に反射するあるも續て來る所の刺激は動神經に反射して現は

習慣と腦髓の關係



る、こと能はず腦中に散亂して終に滅亡するが如し然れとも若し特殊の方法によりて動神經と感神經の間に定りたる關係を附け甲の感神經を刺激するときには必ず乙の動神經に反射するが如くならしめ屢之を反覆して終に習慣とならしむるときは甲なる感神經と乙なる動神經の聯絡は再び破壊せらるゝことなく永く維持し得べきものなり斯くして此二神經の關係定まり感神經の刺激が常に定まりたる動神經に反射して運動を生ずるときは之を稱して習慣といふ

比喩を假りて之を説明せん今腦髓を以て一の大商店と假定せんか若し其商店にして一定の規律なく頗る混亂の状態にあるときは一々顧客の需に應じて物品を賣ること能はず顧客中或者は僥倖にして其望む所の物品を得ることあるべしと雖も他者は混雜の爲め終に其望を遂げずして歸ることあるべし而して望を遂ぐるものは感神經の刺激が動神經に反射するものに同く望を遂げざるものは感神經の刺激が腦中に散亂して終に滅亡するに等し之に反して商店の事務萬端整理しすべて秩序的に運動し能ふと

三〇

三

習慣と理性

きは顧客は皆其望に應じて物品を購求し得べし好良の習慣を有する腦髓は猶ほ整頓したる商店の如し感神經より來る刺激の性質に應じて直に動神經を刺激し筋肉をして秩序的の運動をなさしむ

是に由りて之を觀れば此二神經の關係は猶ほ指と掌の如く生來既に一定したる關係を有するにあらず初め秩序なき單一の組織なりと雖も漸く經驗を積むに隨ひ扈難にして且一定の關係を有する組織となるなり斯の如くして得たる組織が活動するとき之を稱して習慣といふ

斯く習慣の根本は神經の組織にあるが故に特に神經を勞せずして器械的に運動するものなり固より習慣を養はんとする初に當りては精神を用ひ特別の注意をなさざるべからずと雖も其漸く積で習慣となるに至りては隨て注意を要すること少く終に無意識に其働きを遂ぐるに至る例へば音樂者が琴を彈するや初之を習ふときは精神を勞すること少からずと雖も後習慣となるに至りては幾んど器械的に手を運動せしめ而して尙ほ一音半調も誤ることなきが如し



習慣を生ずるには種々の原因ありと雖も大別すれば左の二種に過ぎず  
第一偶然に發したる習慣 例へば吾人路上に知人に逢ふときは帽を脱して禮するを習慣となす故に帽を被らざるときも尙ほ知人に逢ふときは手を頭上に擧ぐることもあり是れ偶然に得たる習慣なり

第二意志と理性の助けによりて生じたる習慣 前例の音樂者が琴を彈するが如き其一例として見るべし

偶然に生じたる習慣其數甚だ多しと雖も其中に就て撰擇し一部を滅亡せしめて他の一部を確固たらしめ之を維持するには自ら二種の勢力ありて存す

第一 人間生存の爲めに便宜を與ふる習慣は生存し之に反するものは廢滅するの傾向あり

第二 精神の慾望に満足を與ふるものは生存し之に反するものは廢滅するの傾向あり

斯くして偶然に生じたる習慣中善良のものを生存せしめ不良のものを廢

滅せしむる傾向ありと雖も尙ほ往々不良のもの殘存して不都合を生ずること尠少ならず故に意志と理性の援助によりて不良の習慣を打破せんことを力め又更に善良の習慣を養成して以て精神の活動を補助せざるべからず

或人言ふ人間は習慣の結合なりと蓋し吾人精神の活動中習慣に依りて動くもの甚だ多きの謂なり抑も小兒出生して始めて手足の運動をなすや主として本能の幫助に依ると雖も漸く成長し經驗を積むに隨て習慣發達し尙ほ更に成長するに途で既得の習慣は恰も器械的に運動し終に精神の活動をして漸く器械的に偏傾せしむるものなり是に於てか意志と理性は其不良の習慣を打破し善良のものを養成せんとして常に汲々たりと雖も習慣の勢力強盛に過ぐるときは却て意志及び理性を制し其勢力をして薄弱ならしむることあり斯の如き場合に於ては人は習慣の奴隸となり終に習慣にあらざれば何事をもなし能はざるに至る故に教育を以て人心を鍊磨するは一は善良の習慣を養ふにありと雖も他の一方に於ては理性を發揚



習慣の利

せしめ意志の力を養成し人をして習慣の奴隷たらしめず精神をして益發達せしむるを其目的となすものなり

斯く習慣が理性を壓制するときはその害實に少からずと雖も適度に之を利用するときは其効甚だ大なり

第一 習慣は人の働きに規律を與ふ

第二 一たび善良の習慣を得るときは後精神を勞することなくして多くの働きをなし能ふ

第三 習慣は容易に情を抑制し能ふ

第四 習慣は時の異なるに關せず其働きに直接の關係を有せしむ

例へば過去に得たる習慣を以て現在の活動を制し又精神を勞して得たる習慣を以て將來に於ける働きを支配するが如き是なり故に幼時に得たる習慣は壯年に至りて其効を奏し壯年に得たる習慣は老年に至りて其効を顯はすものなり

是に由りて之を觀れば習慣は猶ほ記憶の如し記憶は感神經及び精神の理

本能

性及び感情的性質に直接の關係を有す而して習慣は精神の刺激的性質動神經及び筋肉に直接の關係を有するものなり故に記憶は感覺的の習慣にして習慣は運動的の記憶なり習慣と教育とは直接の關係あるものにして實地教育者の特に研究すべき所なり

本能は其性質大に慾望に類似する點ありと雖も又少しく異なる所あり凡そ慾望は其初め精神不満足を生じ終に理性の助けによりて之を満足せしむるものなり然れども本能は理性の助けを藉らず自然精神中に發する感情直に動神經を刺激して之を運動に表はし其運動直に精神に快樂を與ふるものなり以下之を説明せん

吾人は皆衣食住を求むるの慾望あり故に吾人は此慾望を満さんが爲め多少の勞を費さざるを得ず乃ち將來に之を得んとする望あるときは吾人は業の難易を問はず勞を費して之を得んとす而して其慾望の大小と之を満さんが爲めに費す所の勞力とは一定の關係を有す即ち後者は前者より小ならざるべからず是れ慾望の特有性なり



今少しく眼を轉じて鳥の巢を構造するを見よ其常に役々たるは是れ後日其卵子を産み此に孵化せしめんとする慾望ある爲めなるか若し夫れ斯の如しとすれば其巢を構造するは鳥の慾望なりと言はざるを得ず然れども實際鳥は斯く將來を豫想するものといひ難し其巢を構造せんが爲めに汲々たるは或は藁屑柴朶を集むるの業其れ自らが樂しき故に然るならん果して然らば後日卵子を産之を孵化せしめんとするは是れ其豫想する所にあらざるべし

人の食事をなすや猶ほ斯の如く其物の滋養分及び身體の健康に關して考ふることもなく全く口を樂ましめ腸を醫するを以て其目的となし食事より來る結果如何を忘るゝことあり斯く働きの結果好良なるか否かを問はず唯感情の刺激によりて外部の運動を生ずるもの之を稱して本能的運動といふ

又富真正の富を云ふ敢て金錢の多量をのみ云ふに非ずを得んとするは吾人普通の慾望なり吾人は此慾望を充さんが爲めに日夜焦慮勞役して敢て

懈らず然るに世に之に類似したる一種の本能あり之を名けて吝嗇といふ吝嗇は真正の富を得んとするにあらず只他人より金錢を受取るを以て快樂とし之を他人に渡すを不快樂となす斯の如きは殆んど理性の勢力を有することなく猶ほ鳥の藁屑柴朶を集むるを以て快樂とする如く毫も將來を測らず只金錢を集むるを快樂とするものなり  
本能は元と遺傳より得るものにして其運動直接に快樂を與ふることあり又然らずして唯器械的に働くことあり例へば精神の活動と表出の關係の如しこは後章に於て論述せん

## 第十八章 慾望

既に前に述べたる如く一の觀念精神中にありて自働し他の觀念を支配することあり而して其觀念には或は快樂を生じ或は不快樂を生ずるの性質あり即ち快樂を生ずる觀念と不快樂を生ずる觀念と精神中に競争し前者勝つときは快樂を生じ後者勝つときは不快樂を生ず斯く精神の現象にも



亦生存競争の理法行はる

精神の現象を生ずる原因二あり

第一 主観的觀念に起因するものなり更に之を別て二とす

其一 既に經驗したる事實が記憶の心象となりて精神中に現はれ過去の  
ことを思はしむること

其二 想像によりて是等の心象相結合し未だ經驗せざる新奇の事實起ら  
んとするを豫想せしむること

第二 客観的觀念に起因するもの即ち外物、五官を刺激して吾人の精神中  
に知覺を生せしむるなり

以上の二原因共に働きて精神界の活動を生ず而して精神界に現はるゝ觀  
念は其數甚多しと雖も意識に限りあるが故にすべての觀念を同時に意識  
中に存せしむる能はず是に於て或觀念は意識中に存し他の觀念は其境域  
以外に去らざるを得ず而して如何なる觀念が生ずるに適し如何なる觀  
念が退去せざるを得ざるかは是れ心理學者の研究すべき所なり

今力學の比喩を假りて之を説明せん力學には動學と靜學あり後者は相平  
均したる力の學理を論じ前者は其不平均のものを論ず即ち力相平均すれ  
ば運動存せず運動は實に其不平均に基因するものなり  
精神中の現象も猶ほ斯の如く意識中に現はるゝ諸種の觀念は其原因一な  
らず隨て相互の關係に於て矛盾することあり次で不平均を生じ觀念中競  
争を始む其觀念中勢力強きものあり弱きものあり強きものゝ中にも一時  
勢力強く暫くして之を失ふものあり憤怒の情の如し又飢渴の感の如きは  
一時勢力強盛なるのみならず之を満足せしめざれば益其勢力を増加し之  
を満足せしむるに至りて始めて止む之に反して一時勢力強盛ならずと雖  
も永く存在して之を止むること甚だ難きものあり復讐の念の如き倫理的  
感覺の如き又一事を成就せんとの決心の如き其適例なり  
斯く觀念の強弱に關して其類一ならざるが故に一時意識中に活動して他  
の觀念の現はれんとするを障害するものあり又意識の下層に存在して意  
識中の現象を支配し他の觀念來りて之を妨害するものあるときは一時意



識中より退くが如く見ゆるも其障礙物の去るや再び現はれて元の勢力を復するものなり而して是れ等の觀念意識中に新陳代謝するに當り腦髓中に多少の激動を生じ其一部分は動神經の中央を刺激して筋肉の收縮を起し爲めに身體の運動を生ず又他の一部分は腦髓中にありて精神の活動を助くるものなり

以上講述したるは觀念の強弱的性質に關する一般の理法なり以下觀念の形質的性質に就て少しく説明すべし前既に論じたるが如く精神は過去の事を記憶し現在の事を知覺し又未來の事を想像するものなり而して精神發達の度少き者は記憶及想像すること少しと雖も其漸く發達するに隨て過去及未來に就て想像し精神の界域を皇張するものなり過去、現在、未來を比較して考案し精神中に精神的の好みを生ず而して快樂の觀念は精神中に生存する勢力を有し不快樂の觀念は他の觀念の爲に制せられて意識中より退けらるゝの傾きあるものなり

觀念に強弱的性質と形質的性質とありて意識中に於て觀念の新陳代謝す

觀念活動の方向

る方針を定むること以上説述したるが如しされば觀念の運動をして自然の方向に任せ毫も人爲を以て之を制することなくんば快樂不快樂は各其時々の勢に應じて現出し人は恰も運命の爲めに犠牲となるが如く或は快樂なることあり或は不快樂なることあるものなり夫の發狂者の精神の状態の如き即ち然り

然れども吾人は不快樂なる境遇に在り精神快鬱を以て充滿せらるゝも精神には元と自動的注意ありて快樂なる觀念を自覺の中心に蒐集し之によりてたいに不快樂の觀念を逐去し得るのみならず若し適當の方法を以てせば不快なる境遇をも快樂圓滿の境遇と變更するを得べきなり之と同じく若し吾人の境遇快樂にして精神中歡喜の念充滿するときは永く其境遇を保続し得るものなり故に精神が自動的に活動するときには常に不快樂を去り快樂に移らんとするものにして決して快樂を去り不快樂に進むものにわらず

抑も自動的注意は意識中に現はるゝ他の觀念を支配する力あり而して自

觀念の力



覺の中心に現はれたる觀念は之によりてたゞに意識中の觀念を支配するのみならず吾人の周邊に存在する物質的境遇をも變更するの力を有するものなり而して其觀念が物質的境遇を支配する方法の詳細は社會學の研究すべき所なるが故に予は只其大略に就て講述せんとす

觀念が自動的の活動によりて意識の中心に來るときは其觀念が精神及身體に及ぼす所の勢力の大小は左の事情によりて變化するものなり

第一 觀念が現在の快樂を持続せんとするときはその勢力の大小は現在の快樂の大小と正比例に變じそれに繼で來らんとする不快樂の度の轉比例に變ずるものなり

第二 觀念が未來に快樂を得んとするときはその勢力の大小は現在の不快樂と轉比例に變じ未來に於て得んとする快樂の大小と正比例に變じ又其快樂を得る時間の大小と轉比例に變じ終りに其快樂を得ることの方法の確實なること、正比例に變ずるものなり

此の如き比例を以て自覺の中心にある觀念は精神と身體とを活動せしむ

## 慾望の發する状態

るものにして人の有意の働きの根原となるものなり故に觀念が現在の快樂を保続せんとし或は未來に於て快樂を博取せんとする性質より考ふるときは此觀念を慾望と名け又慾望を満足せしめんが爲めに其觀念が精神を支配し且身體をして運動せしむるの性質に關して考ふるときは之を精神の動機と稱す

慾望の發する状態を大別して四種となす

- 第一 現に存在する快樂の滅亡せんとすを恐れ永く其存在を保維せんが爲めに力を用ふること
  - 第二 特に希望する所なきも只現在の苦痛を免れんことを求むること
  - 第三 現在の状態に關せず將來に於て快樂を得んを求むること
  - 第四 將來に於て來らんとする苦痛を避けんを求むること
- 是なり而して以上四種の中第一と第三とは密切の關係を有す抑も現在有する所の快樂を失ふは即ち將來に不快樂を得んとすることなり何となれば將來の不快樂を避け現在の快樂を續けんとするものなればなり



又第二と第四とは密着の關係を有す何となれば將來に快樂を求めんとするは現在の狀態を以て満足せざるが故なればなり故に現在の苦痛を免れんとするは即ち將來に於て快樂を得んとすると同一事なり。此に一の注意を要することあり抑も快樂と苦痛とは相關的の語にして快樂の上に尙ほ快樂あり苦痛の下にも亦更に苦痛あり故に今、甲なる快樂あり尙ほ之に超ゆる乙なる快樂ありとせんか甲は快樂なりと雖も乙に比しては尙ほ不快樂なりと言はざるを得ず故に、甲なる快樂を有すと雖も尙ほ乙なる快樂を得能ふときに於ては甲を不快樂なりとして乙の快樂を得るまでは満足し能はざるものなり之と同しく既に乙なる快樂を得たる後再び乙を去りて甲の快樂に歸らんとするときは甲は乙に比して不快樂なるが故に成るべく乙の快樂を永く維持せんとするものなり又苦痛に於けるも之と同一にして甲の苦痛に超ゆる乙の苦痛ありとせば甲は乙に對して快樂なりとせざるを得ず。

## 慾望と理性の關係

慾望の發する順序に就て一言すべし最初精神中に感情的の現象起り精神

の全局を奪ふときは別に慾望の存することなし然るに將來に關する一の理性的觀念發して爲に來らんとする不快樂の觀念若くは現在の狀態の不充分なるを思ひ將來に於て之に優る快樂を得んとするの觀念精神中に起り精神に刺激を與ふ而して之に伴ひて又其慾望を遂ぐるを得るや否やに關する理性的觀念現はれ若し此慾望を満足せしむる方法明了なるときは其慾望復た精神を刺激するに至ると雖も之を満足せしむる方法不分明なるか或は到底之を満足せしむるの望なきときは其慾望は一時精神に刺激を與ふるに拘はらず漸く勢力を失ひ遂に滅亡するに至るものなり故に慾望の刺激的性質も亦之を満足せしむる所の方法に關する理性的觀念と密切なる關係を有するものなるや明かなり。

慾望の刺激的性質は動神經に刺激を與ふるものなり而して動神經の刺激が身體に運動を與へ身體の運動によりて吾人の身體を圍繞する所の物質的境遇を支配し遂に吾人の五官に刺激を與へて吾人の慾望を満足せしむるは感神經の作用によらざるべからず而して動神經と感神經との作用を



連絡せしめ以て其目的を遂ぐることを得せしむるは是れ理性の然らしむる所なり是に由りて之を觀れば慾望は動神經及感神經の結合したる作用に基因するものなるが故に自覺の範圍内にあること明かなり

### 第十九章 意志

意志は觀念の動神經を刺激し身體を運動せしむる性質にして精神と身體との關係を親密にするものなり抑も精神の活動は必ず腦髓と分離すべからざる關係を有するが故に今意志の性質を論せんとするに當りては吾人は動神經の腦髓に於ける關係を知らざるべからず然るに其關係甚だ不分明なるを免れずフエリヤは曾て腦髓の諸所に電氣の刺激を與へ其結果によりて身體の運動するを見腦髓の各部分が身體の諸部に於ける關係を發見したり然れども尙ほ仔細に之を研究するときは其發明たるや初め吾人が希望せし程の價值を有せず何となれば電氣を以て腦の一部を刺激するときは其刺激は直に流布して其附近の部分をも同時に刺激するが故に明

三〇

意志と腦髓との關係

意志

三

意志活動の狀態

かに區域を定めて此部分は腦の運動を司り彼部分は顔の運動を司ると確定し能はざればなり且之に加ふるに腦中甲の部分を刺激するときは顔の運動を生ずるものと假定せんに其甲の部分を取り去るときは暫く顔の活動力を失ふと雖も直に之を回復す即ち乙の部分甲に代りて其役目を務むるが故に必ずしも甲の部分のみか顔の運動に關係を有すと斷言すること能はず此の如くなるが故に腦髓と筋肉收縮との關係に至りては生理學よりして研究すべき所甚だ多きのみならず生理學上より是等の關係を明らかにするに非ざれば眞正確實なる心理學を組織すること能はず現今の心理學は未だ幼少にして吾人に満足を與ふる能はず只後日心理學の發達して確實なる一の科學とならんことを待つべきのみ  
斯く不明確なるをも顧みず予は試みに少しく論述すべし抑も意志の根本は自覺と慾望とにあり慾望は精神に活動を與ふる根本なり始め慾望の發するときは甲乙を區別せず只純粹なる衝動に過ぎず而して理性の働き漸く之に加はりて其衝動を満足せしむる方法を解するに至る此に於て精神



中に發する衝動の中或者を吸収し或者を強め慾望を満足せしむるの目的を遂ぐる爲めに適當なる運動をなさしむるものなり  
 今比喩を以て之を説明せん山頂に湖水あり其水數條に分派し谿谷に沿ひて流下すこは恰も慾望の衝動力が數條の動神經によりて身體の運動を生ずるに相似たり今此水力を利用して人力を補助し機械の運轉をなさしめんとするときは必ず先づ其方法を明亮にせざるべからず即ち機械の構造及機械据付場等を明に定め次に彼の數條の水流中不用のものを止め一の谷川に餘他の水を送り或は其谷川の形狀を變ずること等によりて水車の運動に便ならしむ是れ猶ほ意志が精神中に於て慾望の活動を支配する状態に同じ

慾望は働きの根元にして意志は其外部に發するものなり是に由りて之を觀れば意志の働きに二の區別あるを知る

第一 正面的の働きのして意志が身體の活動を爲さしむること

第二 反面的の働きのして不用なる精神の活動を吸収すること

意志の正面的

是なり今此區別に就て少しく論せん

第一 意志が身體の或運動を惹き起すときに於ては精神中左の觀念之と

同伴す即ち

(イ) 意志を惹き起したる慾望

(ロ) 慾望より起りたる衝動

(ハ) 之に繼で來る身體運動の觀念

(ニ) 其運動の終極即ち慾望を満足せしめんことの觀念

是なり以上四個の觀念を合すれば則ち自覺を組成す故に自覺は意志と密着の關係を有するものなり換言すれば精密に意志と稱すべきものは以上に述べたる慾望より起る衝動即ち是なり故に意志は自覺中の一原素に過ぎざるなり

而して衝動の發するや之に次で身體の運動を生ずるのみならず身體の運動は筋肉收縮の感覺によりてまた意識中に報道せらるれば衝動と衝動より來る筋肉收縮の感覺とは互に引き續きて來るものなり然りと雖も此



二者間に如何なる關係の存するやに至りては吾人之を知る能はず意識の範圍内より考ふるときは此二者は互に相續で來るのみにして其關係に至りては毫も指示する所なし若し之を原因結果の關係なりとせんか慾望の衝動が筋肉收縮の原因となりたるなり然れども是れ間接に推理によりて定めたるものにして衝動と筋肉收縮の感覺とが續て意識中に現はれたるときには原因と結果の關係なるか然らざるかに至りては毫も直接の智識を與ふるものなきなり又衝動即ち意志と稱するものは獨立したる自動及自發的のものなるか或は慾望の衝動力が動神經を刺激するとき意識中に現はるゝ一種の感覺なるか若し前者をして眞ならしめば意志は自動的の一種の力なり是れ中古哲學者の固持せし議論なり然るに若し後者をして眞ならしめば意志は慾望の衝動が動神經を刺激するとき發する一種の感覺に過ぎず

以上の點より考究すれば意志は自動力にあらすして一種の感覺なるを知る而して其感覺の誤りたる思想を惹起し自動的のものならすして尙ほ自

意志反面  
的活動

動的なるが如き感覺を生ずるものなり例へば机の上に手を置き自ら其机を押して動かすも之を覺らず却て机の自然に動くが如く感ずるが如し而して此場合に於ては恰も其反對にして慾望の爲めに衝動せられたる運動が自動力なるかの如く思惟せらるゝなり

第二 慾望の衝動は甚だ漠然たるものにして心身諸種の活動と調和するあり或は調和せざるあり調和するものは互に其活動を助くると雖も不調和のものは互に相衝突して其活動を妨ぐるものなり之を腦の吸收力といふ故に慾望の衝動及習慣より來る活動にして互に相衝突するもの若くは精神を害する所の精神活動は凡べて此吸收の爲めに滅亡せらるゝものなり

吸收に就て或生理學者は説明すらく腦中に一の吸收點あり此點は腦髓の他部と異り之を刺激するときは動神經に活動を與ふるの代り却て他の活



動を止むるものなりと又他の生理學者は曰く腦の細胞は如何なるものも其活動するときは一部分は正面的活動を表はし又他の一部分は吸收力となりて他の活動を吸収するがために費さるゝと  
 以上の點より考ふるときは意志は腦の吸收力なりと謂はざるべからず元來注意は一點に精神の活動を現はすと同時に他の活動を吸収として精神を靜穩ならしめ以て彼の一部分の觀念を明かにするものなりされば意志の活動も亦反面的に現はれて不用且有害なる精神の活動を吸収するや必せり

### 第二十章 自覺

自覺は意識の一種なり故に予は先づ意識の性質に就て左に講述せん  
 意識の性質にして既に明瞭ならば自覺に就て得る所蓋し尠少ならざらん抑も神経系統は之を分ちて感神経及び動神経の二となす而して神経系統の中樞は腦髓中にあり其外端は身體の諸部分に散布して終る其外端を周

的反省及目的

自覺

圍圍と名く而して神経の周圍を刺激すれば其刺激腦髓に傳りて感覺を生ず腦中に感覺を生ずるときは其感覺は腦中に吸収せらるゝか否らざれば動神経を刺激して筋肉の収縮を惹き起す又腦中に吸収せられたるものは全く滅亡するあり或は一時滅亡したるが如きも後他の感覺と結合し腦中に新感覺を起して動神経を刺激するものあり而して外部より受け得たる刺激腦中に入り直に動神経を刺激して運動を生ずるときは之を反省と云ふ又刺激を吸収して後更に新刺激を生じ動神経を刺激するときは之を自動といふ故に動神経が刺激を受け筋肉の収縮を惹き起すには反省によりて刺激せらるゝものあり又自動によりて刺激せらるゝものあり此二者は之を判明に區別せざるべからず

反省の二種

反省に二種あり  
 第一 無意識にて反省するもの例へば眼の筋肉の如きは初め光線網膜を刺激しられより神経の中心に至り動神経を刺激し眼をして適宜の方向に運動せしむ是れ殆ど無意識の反省に由るものなり又人の歩行するとき遠



然危難に遭遇せんとし適當に之を避くるハ皆無意識反省の爲さしむる所なり

第二 意識中に現はれ感覺を惹き起して直に反省するものあり例へば身體の一部分を強く刺激して之に痛みを與ふるときは直に身體を動し之を避けんとするが如し斯の如き時に於て其運動は定まりたる目的を有す即ち其痛みを避けんとすることは是れなり

是れ等は固より反省なりと雖も又往々自動の性質を混合することあり右の如き場合に於ては身體を動し其痛みを避くるに至りて止む然れども若し其痛みを避けんとする目的を遂ざるときは數回運動し其目的を遂くるに至りて始めて止むが故に是れ等は又自動の性質を混するものと謂ふべきなり

自動の二種

自動にも亦二種あり

第一 精神中に發する情のため自發的に動神經に刺激を與へ外貌に現はるゝものなり即ち此運動は故意に出づるにわらず精神中の活動止む能

自覺

はずして自ら外貌に現はるゝものなり

第二 精神の觀念に基因し一の目的を遂げんがために身體を活動せしむるものなり意志の働きはすべて此部に屬す

動神經が刺激を受くるときは精神中一種の感覺を生ず之を神經刺激の感といふ而して其刺激が筋肉をして收縮せしむるときは以上に述べたる種々の原因中如何なる方法によりて刺激するに拘はらず必ず其形態を變ずるが故に筋肉中に散布したる感神經を刺激し復び感神經を通じて腦に傳へ筋肉收縮の感覺を生ず是に於てか動神經刺激の感覺は其結果として筋肉を收縮せしむることを知る別言すれば動神經に刺激を與へたる感覺と其刺激が充分の結果を生じたることの感覺とが相合して始めて自覺なるものを生ずるなり

尙は右の性質に就て仔細に考究するに精神中動神經を刺激したる感覺のみありて而して其刺激は果して筋肉を收縮したりや否やを知らざるときはたゞに完全なる自覺を生ずる能はざるのみならず幻影を生じて自ら欺



くこと少からず故に動神経を刺激したる感覺ありて其結果如何にありしかを知らざるときは是れ甚だ完全ならざるものなり  
又自ら動神経を働かさずして只外物よりの刺激の爲めに惹き起されたる感覺も亦不完全なるものなり是れ等の感覺は固より一種の感覺に相違なく又意識中の現象に相違なしと雖も此二者相合せざれば之を自覺と稱する能はざるなり

小兒出生の時は既に腦中に自動力ありて種々の運動をなさしむ又神經の周圍には種々外物の刺激あり特に飢渴の感の如きは小兒に於て著るきものなりと信す斯く外部よりの刺激あり又腦中に自動力ありと雖も此兩者は殆ど互に聯絡なきが如く一方に於ては飢渴の感あるも動神経及び筋肉を利用して之を満足せしむるを知らず又他の一方に於ては種々の運動をなすと雖も其運動が如何なる結果を生ずるか知らず感神経と動神経とは互に無關係に働くものなり少しく時日を経過するに隨て飢渴の感は小兒をして食を需めしめ恰も魚の喝々として餌を尋ぬるが如き狀を表はす

## 自覺の發達

尙は漸く成長するに及では手足の運動をなし物を把り之を口に入れなどして手足の運動とそれより生じたる結果との聯絡を定む斯の如くして小兒の成長するは動神経の働きと感神経の働きとの聯絡をして漸く緻密に至らしむるものなり

動神経の働きと感神経の働きとは互に相結合して二者一輪をなすが如し故に小兒成長して五六歳に至れば意志漸く發達し動神経を刺激し筋肉及び手足を利用して自分好む所に隨て運動し其希望を満足せしむるものなり是故に感神経と動神経との働き相合せざる時は自覺を生ずる能はず此二者の發達聯絡すると共に自覺も亦發達するものなり

動神経及び感神経を一輪と假定するときには自覺は是等二神経中其孰れに存するかを定むること甚だ難し蓋し刺激兩神経を循環して始めて自覺を生ずるものなれば其刺激は神経の中央より始まるも又周圍より始まるも一周をなすに於ては相異なることなし故に意志の如きは腦髓より始まり動神経を経て外部に出て筋肉の収縮を惹き起し又感神経を経て内部に入り



腦中に筋肉収縮の感覺を生ず之に反して飢渴の感覺の如きは胃より始まり腦に感覺を及ぼし動神經を刺激し手足を利用して其飢渴を満足せしめ又其満足の感覺を腦中に傳へて止む

又特別の注意を用ひて物を考ふるときは筋肉の収縮之に伴ひ筋肉収縮のために精神の活動を助く又突然驚愕するときには心臟の鼓動をして迅速ならしめ爲めに血液の循環を勵まし又腦髓の活動に變更を生ず斯の如く動神經と感神經とは神經の周圍と中心との關係を密接ならしむるものなり尙ほ此思想を擴張して推究するときにはたゞに身体の中に限るにあらず吾人の周圍なる物体にも亦同理を應用するを得べきなり例へば吾人眼を以て物を視るときは物の存在、色彩、及び形体を認識するを得ると雖も今假りに會て手を之に觸れしことなしとするときは充分其物の性質を確知する能はず之を視ると同時に又之に觸れ眼の網膜と手の筋肉及び皮膚とが同時に働きて始めて完全なる智識を得るものなり故に如何なるものど雖も動神經と感神經との結合したる働きにあらざれば完全なる智識を得る能

はざるなり夫れ精神界は茫として廣濶なり隨て其中に現はるゝ所の現象また殆ど究極なし而して此動神經の活動と感神經の活動と相結合して生じたる精神現象をば之を總稱して自覺といふ

自覺は佛教の所謂我にして精神現象の中樞なり他の精神諸現象はすべて自覺を標準として運動す而して自覺の範圍内に現はるゝ現象は意志すべて之を自由に支配するを得るものにして即ち我に屬するものなり其範圍外にあるものは或は一時精神現象となるにも關せず吾人之を支配し能はざるものなり

自覺の範圍内なる精神現象は譬へば籠中の鳥の如く其範圍外なるものは山野に翱翔する飛鳥の如し偶美麗のものあるも己れの欲するまゝ之を使用し能はざるなり

又他の比喩を假りて言へば前者は己れに屬する財産の如く之を使用するは全く己れの權内にあり而して後者は恰も他人に屬する財貨の如く己れ之を自由に使用すること能はず



故に精神現象中に於て自覺の範圍は意志の活動する範圍なり而して其範圍外には決して意志の勢力達せず例ばへ夢中若くは昏迷の時に現はるゝ現象は多く自覺の範圍外にあるが故に其活動を支配する能はず是れ等の現象は自ら現はれて自ら消ゆ其他發狂者の如きは多くは此自覺を有せず然れども自制の範圍内なる精神の活動は總て自覺の範圍内にあるものにして人の人たる所以實に此に基因す

下等動物の精神現象を研究せんとするは甚だ容易ならず然れども從來比較的に攻究したる所を考ふるに人と下等動物と異なる所以は自覺の範圍の廣狹に關するものゝ如し又等しく吾人々類中にありても賢愚才不才の差あるは實に此範圍の廣狹に關するものなり故に教育の重なる目的は人の精神現象中に於て自覺の範圍を擴張せしむるにあり

以上説述せしは一般に涉るものにして實際にありては此他特殊の場合少からず文學者、數學者、理學者等にして自覺を有すること少く昏迷にして大業を成就したるもの其人に乏しからず然れどもとはもと格外のことなれ

## 第二十一章 社會

は教育上希望すべきことにあらず教育上に於ては自覺の範圍を廣め自制力を強め之を發達せしむるを以て其主要なる目的となすなり

前既に論じたる如く愛情は人生固有の情にして人として必ず之を有せざるなきなり而して愛情には各強弱の差あり個人と個人との間に發するものは最も強く其愛する人の數漸く増加するに隨て愛情の度亦減少す而して之を減少すると同時にまた一種の感覺を生ず此感覺の性質は強き愛情より發する快樂と其類を異にし一種特殊なる快樂を與ふるものなり尙ほ之を擴張して一種族或は一國民に應用するときは一種の社會的的感覺なるものを生ず

一社會をなしたる人民は必ず此社會的的感覺を有す即ち日本人には自ら日本人の感覺あり所謂日本魂なるものは是れなり其他英人佛人米人等皆各特殊の感覺を有せざるなし而して斯の如き特殊の感覺存在するは決して偶



然のことにあらず是れ人の奥妙なる性質にして心理學者の當に意を此研究に傾注すべき所なり

社會的感覚は自ら愛國心と差異あるが如し蓋し愛國心とは外國に對して自國を思ふの情なりと雖も社會的感覚は必ずしも外國に對して始めて起るにあらず等しく内國人に對して亦發現して國の風俗習慣を造くるものなり

個人各其特有性あり其特有性に隨てまた各其舉動に差異を生ず寛大なるあり嚴密なるあり磊落なるあり謹直なるあり其差異は殆ど之を數ふるの煩に堪へざるべし而して是等は皆其人の精神の特有性が發して外部に現はれたるものなり社會的感覚も亦之と同じく一社會或は一國家の特有性にして此感覚は一個人の亡ぶると共に滅するものにあらず社會在りて以來漸く發達し今日に存するものは即ち其發達したるものなり而して今日以後もまた社會の存在する間は決して消滅することなかるべきなり

社會的感覚とは人民の心を離れて別に存在するものと言ふか或は各の精

## 社會的感

神中なる感覺より抽象したる總名なるか是れ吾人の研究せざるべからざる所なり或心理學者は曰く一種族には必ず種族精神なるものありこは一個人の精神以外に存在するものにして種族と共に發達し種族の存在する間は決して消滅せざるものなり又社會の活動は時代の經過と共に變遷するものにして其時々に於ての精神なるもの存在すと又他の心理學者の説によれば曰く斯の如き精神は一個人を離れて別に存在するものにあらず唯一個人の羣集したるものを指したる抽象的の總名に過ぎすと予は思惟す以上の説は皆共に極端に走れるものなり一個人を離れて種族精神の存在すべき理なく又種族精神時代精神或は社會的感覚等の如きたゞに抽象的の總名にもあらずと左に其性質に就て少しく説明せん

此に二人の朋友ありと假定せん此二人は互に相愛すること深く二人が未だ知友たざりし以前に於ては曾て經驗せしことなき程の絶大の快樂を其交遊の間に於て感ず而して其愛情は二人の精神中にあり又それより來る所の快樂も實に二人の精神中にあるなり然るに此二人今手を分ちて遠



隔の地に離れ再び相逢ふことなき時に於ては假令其愛情は全然滅盡せずと雖も快樂を感ずること漸く減少して以前の如く快樂を保維し能はざるは是れ自然の勢なりされば此愛情は二人の精神外に存するにあらずと雖もまた二人の精神の現象より抽象し來りたる總稱にもあらずなり即ち甲と乙とが互に一の特殊なる關係(相接近すること)によりて其愛情を惹き起すものなれば愛情は一個人の精神の性質と其甲乙の特殊なる關係とに基因する一種の感覺なりと謂ふべし隨て愛情は甲の精神と乙の精神中のみ存するものにあらずして甲と乙との特殊なる關係に存するものなりと謂ふを得べきなり

之を譬へば火の燃ゆるは酸素の性質にあらず又水素の性質にもあらず此二原素相合する特殊の關係に基くものなり又蒸氣力が社會の爲めに驚くべき仕事をなすも之を以て蒸氣力のみ作用に歸する能はず蒸氣力と機械の構造と相俟て始めて然るを得べきなり社會的感覚或は種族精神もまた之と同じく勿論一個人の精神中に存するものなりと雖も之に加ふるに

## 要素

一個人相集り社會を組織することおよび始めて之を生ずるものなり  
一種族に就て社會的感覚を發せしむるものを擧ぐれば其數甚だ多しと雖も主要なるものは

第一 遺傳によりて多少性質の相似たること

第二 同一なる言語を有すること

第三 思想を交換するの密なること

是れなり一社會は必ずしも同一種族より組織せらるゝにあらず又一社會中必ずしも同一の言語を有するにあらずと雖も一社會は互に思想を交換すること甚だ密なるものなり又

第四 同政府を有すること

第五 同一の敵を有すること

等之れが原因となるものあり我帝國の如きは一種族を以て一社會をなし又一の國家(法律的社會)をなすが故に社會的感覚非常に發達して所謂日本魂なるものを生じたるなり其光耀々として我天地の間を照すもの豈偶然



ならんや

されば社會的感觸種族的感觸及び國家的感觸は相互親密の關係を有するものにして其種族の性質社會の組織等に基因するや明かなり而して社會の風俗習慣文學國家の組織等は此社會的感觸の客觀的に現出したるものにして又之によりて益社會的感觸を養成するを得べきものなり

### 第二十二章 表出

表出

神經の周圍に刺激を與ふれば神經は之を中心にして傳ひ精神中に感觸を惹き起す又精神中に感觸あるときは之を動神經に傳ひて筋肉の收縮を惹き起し其感觸を外面に表出するものなり表出は即ち筋肉の收縮に在りと雖も身體中に在る所の筋肉は其數甚だ多きが故に感觸の種類異なるに従ひ甲類と筋肉收縮の關係とを研究せんとす

表出に就ての研究は甚だ容易の業にあらず表出は手足の運動身體の運動

及び顔色等に於てするが故に今之を研究せんには先づ是等を區分せざるべからず予は第一に感觸と顔色との關係を論せんとす

情内に動くときは之を制止せんと欲するも能はず自ら外面に表出す憤怒歡喜恥辱等の如きは其表出するや種々顔色を異にすと雖も凡べて血液の循環を迅速ならしめ顔面紅を潮せしむるに至りては孰れも異なる所あらざるが如し之に反して失望悲哀驚愕等の如きは血液の循環を遲滯せしめ顔色を蒼白ならしむるものなり是等の作用は動神經と筋肉の關係によりて然るにあらずして動神經と動脈との關係によりて發するものなり

顔筋肉に運動を與ふるは腦神經の作用なり而して腦神經が如何にして精神の感觸に直接の關係を有するかに至りては未だ明確の説明を與へたるものなし故に是等の理論は少しく後に譲ることゝなし今顔色と感情との關係に就て之を事實に徴して研究せんとす之を研究せんには先づ左の筋肉の位置を知らざるべからず

第一 前頭蓋頂筋は額の前面に廣がりそれより頭上を越へ頭の後部に

筋肉の位置



達して終る此筋肉を収縮せしむるときは顔の全体を引上ぐる働きをなす

第二 皺眉筋は鼻の本より起り眉に達す此筋肉収縮するときには眉を内下に引き寄せ顔の中央に縦皺を生ず

第三 眼瞼輪匠筋は眼の周圍にあり括約筋の一種なり此筋肉を収縮するときには眼を閉づるの働きをなす

第四 鼻梁筋は前頭蓋頂筋の下りて鼻骨に固着する所の筋肉なり

第五 内眦頭筋は内眦の部位に於て上顎骨の前頭突起鼻背とより起り鼻側に沿ひて下行し一部は鼻翹に至りて終り他の一部は上唇の外皮に至りて終る

第六 下眼窠頭筋は眼窠の直下に於て上顎骨体の眼血の全部と額眼突起とより起り下眼窠孔の内方に傾きて下行し内眦頭の後より鼻翹と上唇との外皮に至る

第七 額骨筋は扁平圓柱狀の筋にして額骨弓の上縁より短腱を以て起

三

り咬筋の前上部を超えて内下方に向て斜走し口角に至りて犬齒筋及び三角頤筋と錯綜し其部の外皮に終る

第八 頰部の内部は鼻骨の内眼瞼鞅帶に近き部及下眼窠縁の眼窠の停止する下部より起り外部は眼窠部と帽狀腱膜の額骨弓上に位する部より起り纖維多くは起首より起首に向て交互弓狀に移行すと雖も或纖維は鋭鈍不定の角度を以て相交錯し頰部の外皮に至りて停止す又外部の纖維は方形上唇筋の額骨頭の側縁より上唇の外皮に移行し稀には之を代理するものあり

第九 額骨頭筋は長狹扁平にして額骨の顔面の前下部より起り眼瞼輪匠筋の頸部より數條の纖維を合併し内下方に向て斜走し下眼窠頭の近傍に至りて外皮に終る

第十 三角頤筋は扁平三角形の筋にして數枚の小尖葉を以て下顎骨の下縁より淵頸筋の停止及方形頤筋の起首と相交錯して起り口角に向て上行するに従ひ漸々集束し口角に至れば額骨筋の纖維と錯綜し一



部は上唇の外皮に終り他の一部は口角の鞅帶に終る

第十一 方形頤筋は潤頸筋の一系にして三角頤筋の起首と交錯して下顎骨の下縁より起り上内方に向て斜走し下唇の紅縁と横渠との間の外皮に至りて終る

第十二 笑筋は薄弱なる筋にして下顎骨枝の後縁と耳下腺筋膜とより起り潤頸筋の纖維を超えて前行し漸々口角に向て集合し三角頤筋の纖維と錯綜し其部の外皮に終る

右の筋肉の説明は主として田口和美氏の解剖攬要に據る

顔の筋肉錯雜なること實に以上述ぶる所の如し而して筋肉の収縮と弛緩とによりて種々の表出をなすものなり是等の筋肉は之を概稱して表出筋肉と名く

顔の表出を示さんが爲めには先づ小部分より説明を始めんとす

第一悲嘆及び心配の表出 此表出は皺眉筋の収縮によりて表はる故に眉の内端を互に引き寄せ且引き下ぐるが故に眉の間に縦皺を生じ且同時に

悲嘆及び心配

號泣

前頭々蓋頭筋をして収縮せしむるが故に額を横斷する所の皺を生ず此二皺相合して方形の三邊の如き皺を生ずるなり是れ即ち悲嘆及び心配の皺なり

第二號泣の表出 精神中に苦痛を感ずるときは口の兩端を下に引き下げしむるの傾向あり故に心配に於ける表出の作用とは全く異なるものなり而して始めは叫ぶことに抵抗せんとするが故に口の括約筋収縮すと雖も遂に叫び出すに及んで括約筋は抵抗する能はず口を開くに至る然れども全体に就て言へば凡べての筋肉収縮せんとするの傾向あり而して眼瞼輪匠筋も亦非常に収縮し眼球を押し付くるものなり

第三笑の表出 笑には口の括約筋弛緩して口を開き頤骨筋及び笑筋の収縮によりて口の兩角を廣げ少しく上に引き上ぐるの傾向あり之によりて鼻の兩側より口の兩角に達する二個の皺を生ず又下眼瞼部も少しく収縮して眼の外角に少しの皺を生ず今電氣を以て此頤骨筋を刺激するに其顔色以前と大に異なるを見る是に由りて之を觀れば精神の靜穩なるより發す

笑



智力

眼の運動

る愛情は管に顔筋のみ作用に非るや明なり後者の容貌の穩ならざるは恐らくは下眼脰部の収縮なきに由るものならん一説に由れば下眼脰部の収縮は快樂の感を表出するに欠くへからざるものなりと然れどもグーウキンの説く所によれば是れ尙ほ錯雜なる者にして斷言する能はずと

第四智力の表出 智力は常に口の兩角を少しく下に引き下げ且口の括約筋の収縮及び鼻梁筋等の収縮によりて表はる

第五眼の運動 眼球の容は精神の活動を表はすものにあらずと雖も眼球一たび運動するときには精神の現象を表出するものなり眼球の左右に運動するは即ち普通の運動にして外物に注意する人の如きは重もに左右に運動するものなり然れども眼を以て外物を觀察するが爲めに使用せず只精神の活動が眼に表はるゝ如きときに於ては眼は必ず上に向きて動くものなり斯の如きときに於ては眼は物を見るの役目を爲すにあらずして只精神の大膽なる活動を表出するなり之に反して精神謙遜なるときは眼は下に向くものなり



明治三十年四月二日印刷  
明治三十年四月五日發行

(元良心理學與附)

著 作 者

東京市赤坂區板坂町五番地  
元 良 勇 次 郎

發 行 者

東京市神田區裏神保町一番地  
井 上 蘇 吉

印 刷 者

同 日本橋區藥研堀町三十三番地  
仁 科 衛

印 刷 所

同 日本橋區藥研堀町三十三番地  
厚 信 舍

發 賣 所

東京市神田區裏神保町一番地  
敬 業 社



# 各地賣捌所

大坂市備後町四丁目  
 東京市日本橋區通三丁目  
 全 通一丁目  
 全 新大阪町  
 全 神田區表神保町  
 全 京橋區竹川町  
 全 南傳馬町  
 大坂市備後町四丁目  
 全  
 全 南區心齋橋  
 全 北久太郎町  
 全 北久寶寺町  
 名古屋市本町三丁目  
 全 玉屋町  
 伊勢津市大門町  
 和歌山市本町  
 高知市種崎町  
 福岡市博多中島町  
 全  
 筑後久留米市米屋町  
 長崎市酒屋町  
 佐賀市白山町

敬業社出張所  
 丸善 商社  
 大倉 書店  
 小林喜右衛門  
 中西屋 邦太  
 共益 商社  
 吉川 半七  
 梅原 龜七  
 石井 鈞三郎  
 吉岡 平助  
 松村 九兵衛  
 柳原 喜兵衛  
 三木 佐助  
 川瀬 代助  
 片野 東四郎  
 河島 九右衛門  
 平井 文助  
 澤本 駒吉  
 森岡 書店  
 積善館 支店  
 菊竹 書店  
 安中 半三郎  
 河內 壯助

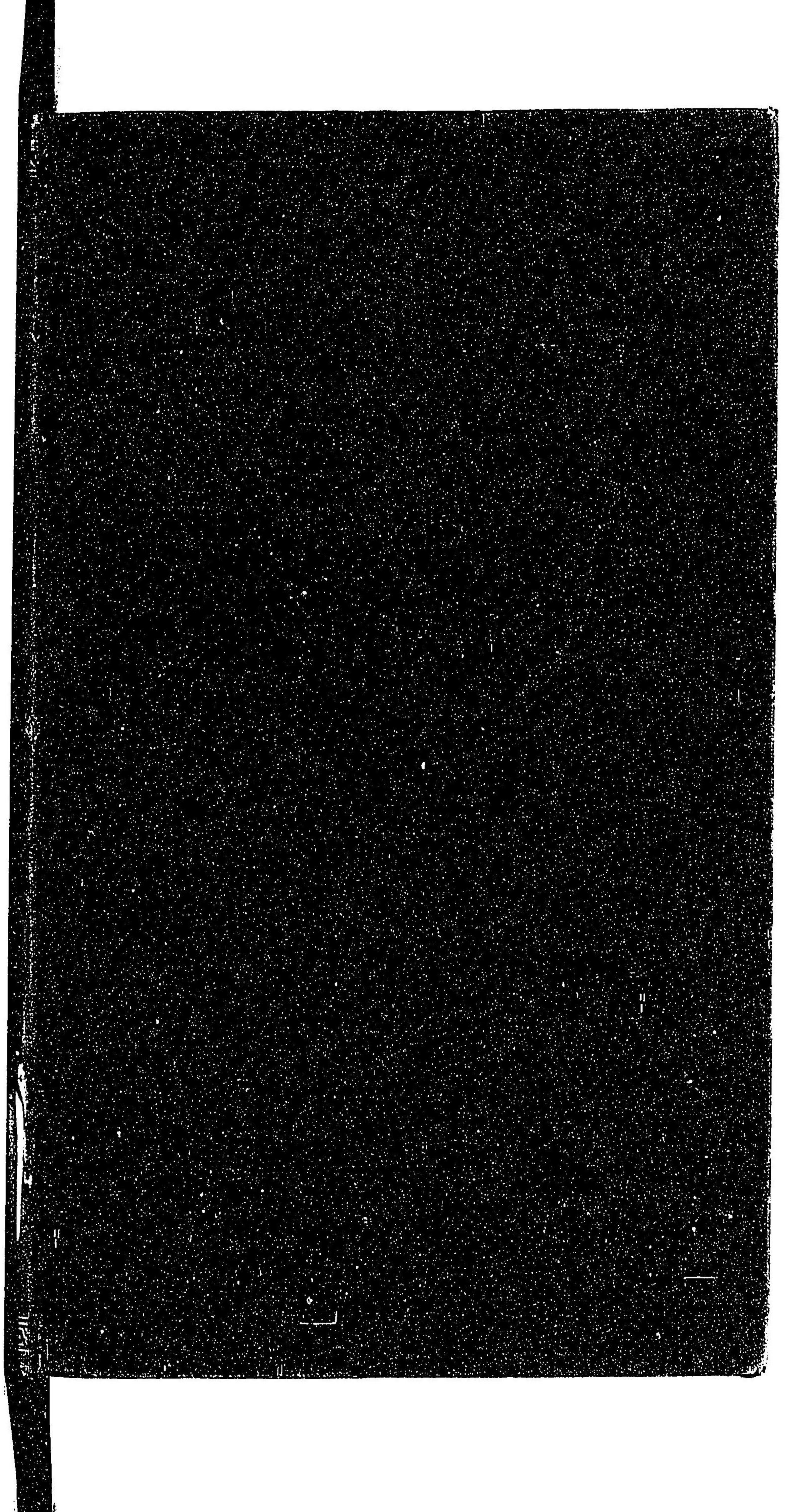
熊本市新町  
 鹿兒島市仲町  
 廣島市鹽屋町  
 滋賀縣大津  
 甲府市  
 信州松本  
 全  
 全 長野大門町  
 全 上田  
 越中富山市  
 全 四十物町  
 越後水原  
 全 新潟市學校町  
 千葉縣千葉本町  
 橫濱市辨天町  
 仙臺市大門  
 全  
 岩代郡山  
 山形市七日町  
 全  
 羽後秋田市大門  
 北海道札幌南一條  
 全

長崎 次郎  
 吉田 幸兵衛  
 積善館 支店  
 淡海 堂  
 柳正 堂  
 水琴 堂  
 高美 書堂  
 西澤 喜太郎  
 同 支店  
 大橋 甚吾  
 中田 書店  
 西村 六平  
 櫻井 產作  
 多田 支店  
 丸屋 書店  
 文 學館  
 高藤 書店  
 富屋 久之丞  
 五十嵐 太右衛門  
 牧野 德太郎  
 鈴木 鐵治  
 小鹽 武吉  
 登間 左右太



74  
120









012636-000-7

74-120

心理学

元良 勇次郎 / 著

M30

AAI-0196





